

沈下橋建設と暮らしの変化

ミャンマー連邦共和国 マグウェ地域 タイエツ地区

テインリン橋（橋長 66 m／幅員 4 m）

2017年度の事業で建設されたテインリン橋は、タイエツの町から西に車で1時間15分ほどのアテッレー村とチンゴン村の境に位置する。沈下橋が建設されたことで、11村、1万人弱が裨益する。この辺では米、ゴマや豆を主に栽培している。アウンランの町側のアテッレー村にはゴマや落花生から油を抽出する機械があるので、橋を渡ってチンゴン村の人が多くやって来る。

アテッレー村の村長で橋建設委員会の会長 U Thein Lwin (57)をはじめ橋建設委員会メンバーや村人が集まってくれた。沈下橋が完成してからどのように変わったか話を聞かせてもらった。

雨季はだいたい6-9月まで。雨季になると河川の流れが激しく、ボートは流されてしまうので利用できなかった。バイクも危ないので運転せず、水牛に乗るか、膝くらいまで泥と格闘しながら歩いて渡っていた。水の流れが早く、特に女性は雨季に河川を渡るのを恐れていたようだ。

アテッレー村には高校があり、在校生270人、教師15人が教鞭をとっている。橋向こうのチンゴン村はじめ6村には中学校分校までしかないので、アテッレー村の高校に40-50人の生徒が通っている。高校に通う他村の生徒が流れに巻き込まれないよう、村人は一緒に河川を渡るなどして、常にサポートしていたようだ。河川の水量が増すと危険なため何日も渡れず、学校を休まざるを得ない日も多かった。すぐに水位が下がらない日もあり、2-3日連続して渡れない日が年に数回あったという。

執筆・撮影者紹介

兵頭千夏さん

ヤンゴンを拠点に、ミャンマーの人々の生活・伝統文化・信仰・女性をメインテーマに撮影している写真家。2003年よりヤンゴン文化大学に2年間留学し、ミャンマー語の通訳者、翻訳者としても幅広く活躍しています。

今回、JIPの沈下橋建設事業がミャンマーの人々の暮らしをどのように変えたのか、現地の撮影や住民へのインタビューを通して、レポートをしていただきました。



タイエツの町側
アテッレー村から見たテインリン橋

雨季の水量は多いが、この地域は水が乏しく、飲料水は井戸や溜池の水を利用しなければならない。何度も井戸まで水を汲みに行く人が橋を往来していた。河川に堰を造った場所で水浴びをし、洗濯している姿も見られた。

「沈下橋が完成してからは往来が非常に楽になったよ。バイクに乗って大量の水汲みもできるようになり、負担が軽減されるようになりました」と U Thein Lwin 村長に笑みがこぼれた。

高校の校長 U Win Myint と教師の Daw Nyo Nyo Aye からも話を聞いた。先生たちはこれまで河川の水量を常に心配していた。水かさが増したら学校に来ないように指導してきた。命の危険があるからだ。河川を渡れず学校を休む生徒たちのため、補習授業をおこなっていたが、橋が完成してからはそのようなこともなくなった。雨季に学校へ通おうとすると、ずぶ濡れになるため着替えを持たせなくてはならない。水流にのまれる危険もある。そんな苦労までさせて学校に通わせたくないという親もいたそうだ。校長いわく、それが今は解消されたので、高校進学率も伸びると思う、雨季の通学問題が解決し、安堵しているという。

また学校で安全指導などおこなっているか質問すると、沈下橋の上で遊んだりせず端を歩くよう、雨季の水量が多い場合は橋の中央を歩くよう朝礼などで話しているということだった。

リサイクル業を営む村人の U Tin Aung (57) には 3 年生になる息子がいる。子どもには橋を渡る時は中央を歩き、車が来たら端によること、その時、落ちないように気をつけなさいと言いつけているそうだ。U Thein Lwin 村長もこれまで事故は起きていないと言っていた。

教育面だけでなく健康面においても喜ばれていた。アテッレー村近隣の 21 村を政府のヘルスアシスタント (HA) が管轄し、子どもたちに予防接種をしているのだが、雨季でも沈下橋のおかげで HA がバイクで移動できるようになったそうだ。

テインリン橋が完成するまでの約 4 ヶ月間、村長であり橋建設委員会の U Thein Lwin 会長は工事の様子を毎日の



橋の横の牛車道



牛車道を行く牛車



橋桁周囲にコンクリートが流されていた



水汲みで多くの人が橋を利用して
していた

ように見にいっていたそう。基礎工事は、しっかり作業されていて堅固な造りだと感じたそう。いくら強固な橋とはいえ長期的な維持を考え、雨季は牛車も橋を利用して良いが、それ以外は牛車道を渡らせるようにしているそう。牛車の車輪外縁の鉄が橋面を痛めるからだ。しかし、1台の牛車が橋を渡って行ったのを見たので聞いてみると、きちんと村人に説明し、この時期の牛車の往来を禁止しているが、守らない人もいるとぼつが悪そうな表情を見せた。そこで「牛車往来禁止」の看板を作ることを検討しているそう。また、橋に続く道の高低差があるため、低くするべきかもしれないとも話し合っているそう。

沈下橋完成後、雨季の水位は、橋面よりも上がったことがないので、毎日、安全に橋を渡ることができたという。水位が上がった時に流れ着いた流木などは、なるべく早く村の有志たちで清掃しているそう。橋維持委員会というのはないが、必要を感じているとのことだった。

沈下橋ができたことで、士気も高まり、さらに村の環境を整え、消防署の配備、溜池の修理もおこないたいと考えているとU Thein Lwin 村長は語った。また、この一帯の若い男女 320 人くらいがタイやマレーシアに出稼ぎをしている現状らしく、それをなんとかしたいと打ち明けてくれた。

最後に、沈下橋が出来たことで悪かった点と良かった点をU Thein Lwin 村長に尋ねた。「悪いことなどひとつもありませんよ。良いことばかりです。村の発展に繋がる利益を受けたと感じています。支援してくれた日本のみなさんに感謝しています。いつもみなさんの健康を祈っています。」

所感

沈下橋建設事業の妥当性は高く、現地のニーズにも沿っていた。また JIP が掲げる上位目標も達成されていた。沈下橋の建築は効率よくおこなわれ、村人が不信感を抱くことなく信頼を得ていた。近隣住民の生活環境は改善され、経済的・社会的インパクトがあった。

沈下橋建設を通じ社会参加精神が高まり、村の発展にかかる活動を積極的に取組みたいという言葉は聞かれたが、持続、自立発展のためにしかるべき対策は実施されていない。牛車の沈下橋通行禁止を伝えるも成功していな



歩行者の往来も多い



下校する児童たち



アテッレー村の高校
U Win Myint 校長(左)と
教師の Daw Nyo Nyo Aye(右)



毎日、農作業のため橋を渡る
Daw Ohwn Kyin
「とても楽させてもらってます」

い。橋維持委員会を設立すべきであろう。建設時の橋建設委員会に女性は参加しておらず、ジェンダー意識が高いとは言えない。積極的な安全指導がおこなわれているとは言い難く、配慮が欠けていると感じた。

話を聞いたのがアウンランの町側アテッレー村の人たちだけであったので、チンゴン村住民の話も聞けば、もっと大きなインパクトがもたらされていることが分かったのではないかと思われた。

同事業は、地域住民のインフラを改善し、社会経済活動に貢献する意義ある事業であったと言える。

フォローすべき点としてひとつあげたい。一部、橋桁の周囲にコンクリートが固まっていること。【写真参照】構造に悪影響を与える訳ではないかもしれないが、不要な物であれば、取り除くよう、説明してはどうだろうか。



橋建設委員会メンバーと子どもたち



アテッレー村・村長で
橋建設委員会・会長の
U Thein Lwin と銘版



通行止めゲート